

平成 20-23 年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (B)  
「語彙とテキスト理解：読解に関わる語彙知識の多面性と語彙の意味について」

研究代表者 堀場裕紀江

## 2010 年度 研究概要

本科研プロジェクトは、テキスト理解にかかわる言語（語彙）とそれに関する知識（語彙知識）について理論的・記述的・実証的研究を行い、その結果に基づき言語教育に向けての有益な示唆を提供することを目的とする 4 年計画プロジェクトである。3 年次にあたる 2010 年度は以下の活動を行った。

言語習得研究班（堀場・深谷・松本・鈴木）は、中級一超級学習者の語彙知識を測定するための 2 種類の語彙テスト（JWMT:語義テスト・JWAT:関連語テスト）の開発については、完全版（対象語 156 個）を完成させた後、これをもとに、短時間で語彙テストを行うために必要な簡略版を作成した。完全版は、昨年度に引き続き国内および国外で数回の調査を実施し、学習者・母語話者あわせて 300 名以上のデータを分析した結果からテストの信頼性と有効性を確認した。応答データは、語の頻度と種類、連想の種類、言語習熟度、母語、学習環境などの影響について分析した。学習者の母語背景については、中国語・韓国語はある程度のデータ数を確保することができたが、その他の言語（英語など）は十分なデータ数が集まっていない。その他の言語グループについては今後もデータ数を追加していきたい。簡易版の語彙テストは、頻度や語の種類等を考慮して作成し、パイロットテストにより信頼性を確認した。

今回開発した語彙テストを使った読解研究については、日本語を対象にした研究と英語を対象にした研究を関連づけながら計画し、読み材料の選定と候補テキストの分析と調整、読解タスクと問題の作成などを行い、予備実験を経て本実験

を開始した。日本人大学生を対象にした英文読解に関する実験は、参加者約 80 名から語彙、読解および作文のデータを収集した。現在データ入力と分析を進めている。日本語文読解に関する実験については、4 月以降に本格的にデータ収集を行う予定である。また、新しい読解およびテキスト処理の理論的研究を把握するために定例勉強会を開催した。

上記およびこれまでの研究の成果について、国内および国際学会(例、ICJLE, ST&D, EuroSLA)等で口頭あるいはポスター発表し、応用言語学・第二言語教育・言語学分野の学術雑誌や専門書および紀要に論文として発表した(あるいは、発表予定である)。

言語研究班(木川・岩本)は、共通語、東京語の基盤となる首都圏方言の実態を探るため、神奈川県小田原市において、アクセント・文法・語彙の調査を行った。さらに、現代では階級社会の成員およびその出身者が用いる一人称代名詞「自分」の明治期以降の用法の変遷をまとめた。また、テキスト理解に関わるテンスとアスペクトの研究については、特に、一般事象と個別事象の区別に関わるテンスとアスペクトの働きについて、「事象アスペクト論」の枠組みで事実関係を整理し、これまでに見落とされていた類型の型を発見し、分析した。さらに中国人日本語学習者の会話インタビューのデータを使って、テンスとアスペクトの習得・使用状況について分析を行った。これらの研究の成果の一部については国内の学会等で口頭発表し学術雑誌および紀要に論文として発表した。